

公民館だより なかがわ

第521号

令和8年4月1日
発行 中川地区公民館
TEL.Fax : 679-2501



～新年度を迎えて～

日増しに春の光を感じる昨今、地区の皆様お変わりなくお過ごしのことと存じます。

中川地区の皆様には、日頃より公民館事業にご理解とご協力いただき、誠にありがとうございます。

昨年度事業につきましても、皆様からのご協力のおかげで、大変順調に実施することができました。厚く御礼申し上げます。

今年度の事業ですが、従来から実施してきたものに加え、気軽に歌を楽しむサークルをなんとか計画したいと考えています。やり方につきましては皆様からのご意見・ご要望をお聞きして進めて行きたいと考えております。

今年度も地域の多くの方が気軽に足を運んでいただき、和気あいあいと楽しんでいただけるような事業を計画していきたいと、職員一同張り切っておりますので、皆様のご協力と積極的なご参加をお待ちしております。

中川地区公民館 館長 齋藤 秀明



職員紹介



館長

齋藤 秀明

事務長

あきよし
酒井 昭孝

地域活動推進員

柏倉 美穂

地域活動推進員

三瓶 良子

上山市青少年育成推進員 山川 和夫

上山市地域づくり推進員 武田 麻奈美

上山市スポーツ推進委員 齋藤 裕之

上山市スポーツ推進委員 齋藤 恭兵

※令和8年度新体制の役員名簿は、別紙にて各戸配布いたします。
どうぞよろしくお願ひいたします。

【一般講座】

参加者募集

「押し花でガラスのコースター作り」

日時：5月19日（火）10：00～12：00頃
場所：中川地区公民館 集会室
講師：佐竹 京子先生（レカンフラワー講師）
内容：選んだ押し花をコースターに自由に並べて
デザインしていきます。
2個作れるので、異なる押し花とデザインで
作れます！置物にしても素敵です♪

材料費：2個で1,500円
（つり銭のないようにお願いします）

持ち物：紙切りはさみ、飲み物

定員：先着15名まで

対象：中川地区民

締切日：定員になり次第締め切り



※参考写真です。
上の写真は4つ並べて置いて
います。
大きさは、1個8.5×8.5cm
になります。

※公民館に見本がありますので、お声がけください！

お申込み・お問合せ：中川地区公民館（☎679-2501）

4月・5月 行事予定



4/1(水) 市報、館報
4/3(金) 会長会総会、協議会総会
中川地区合同懇談会
4/6(月) 子ども会育成会
4/8(水) 山形盲学校入学式、中川小学校
北中学校入学式
4/10(金) ウォーキング教室
(職員不在時間帯あり)
第1回福祉村実行委員会
4/13(月) 体育部会
4/14(火) パソコンクラブ
4/17(金) 中川地区戦没者追悼式
4/20(月) 中川福祉村村議会
4/21(火) 地区公民館職員合同会議
(職員不在時間帯あり)
4/24(金) そば打ち愛好会
上山市地区会長会

5/1(金) 三者会・会長会・協議会
5/8(金) 市報・館報
5/11(月) 第2回福祉村実行委員会
5/15(金) そば打ち愛好会
防犯協会中川支部総会
5/19(火) 一般講座
「押し花でガラスのコースター作り」
パソコンクラブ
5/22(金) 中川地区グラウンド・ゴルフ大会
5/23(土) 粋いき倶楽部開講式
5/26(火) ウォーキング教室
(職員不在時間帯あり)
5/29(金)

グラウンド・ゴルフ愛好会
(月曜日) 4/6、13、20、27
詩吟教室 (火曜日) 4/14、21、28

ラージピンポン愛好会(木曜日) 4/9、16、23、30
スポーツ麻雀愛好会 (木曜日) 4/9、16、23、30

中川地区子ども会育成会連絡協議会 反省会



2月20日（金）、中川地区子ども会育成会連絡協議会の反省会が行われ、多くの感想・意見を伺うことができました。令和7年度は、花火祭り、少年少女球技大会、しめ飾り作り、冬に遊ぶ会などに多くの子供たちが参加してくれました。会議での意見を取り入れながら、来年度もより良い事業を開催していきたいと思えます。各地区子ども会育成会会長の皆様、青少年推進員の山川さん、地域づくり推進員の武田さん、中川小学校PTA会長の黒田さん、各事業にご協力していただきありがとうございました。

【一般講座】「煎茶の美味しい淹れ方教室」

2月24日（火）、『お茶と菓で岩淵』の岩淵さんを講師にお迎えし、「煎茶の美味しい淹れ方教室」が開催され、お茶の淹れ方はもちろん、種類、成分や効能、保存の仕方なども詳しく教えていただきました。最初に茶葉に氷水を入れ15分ほど待って淹れたお茶が全く苦みがなく、びっくりするくらいまろやかで甘みが強く、皆さんから「甘〜い！」の聲が一斉に上がりました。その後も、熱湯や50度以下のお湯で比較しながら自分好みに淹れられる温度を探していきました。岩淵さんのお話も楽しく、充実した時間となりました！



中川福祉村施設訪問

3月3日（火）「中川福祉村施設訪問」が福祉村役員、会長会、民生児童委員の参加を得て開催されました。こちらから訪問する形での開催は7年ぶり、今回は山形育成園と蔵王長寿園を見学してきました。初めに施設の中を案内していただき、入所者の皆さんの生活を垣間見ることが出来ました。その後は、施設の概要説明や質疑応答が行われました。実際に訪問し見学することでより深くそれぞれの施設のことを理解することができました。これからも福祉村の事業等を通して、各施設と中川地区の連携を深めていければと思います。



【一般講座】「春のフラワーアレンジメント教室」

3月24日（火）、「春のフラワーアレンジメント教室」が開催されました。サンゴミズキ、スイートピー、フリージア、ミニバラ、リュウココリーネ、ユーカリ、レモンリーフのお花を使い、先生よりアドバイスをもらいながらアレンジしていき、素敵な作品が出来上がりました。春が待ち遠しくなりますね！！



日本による南進政策が推し進められる中、ドイツによるソ連侵攻が始まり、対外政策はソ連に備える国策が加わります。しかし米英両国は、ソ連の連合国脱落を防ぐため日本の南方政策に経済制裁で対抗します。この米国の制裁に対し日本国内では、対米戦争の気運が高まっています。

本稿では、日本の政策変更に対する米国の対抗措置の状況を記述します。

〈日米交渉が決裂、独ソ侵攻発生〉

日米関係は、中国における両国の経済的利害の対立が国家としての対立へとエスカレートし、昭和十五年代に入ると、今や戦争が現実のものとなろうとしています。

そこで、戦争を何とか回避しようとぎりぎりの交渉が、昭和十六年（一九四一年）四月、ハル国務長官（慎重派）と野村吉三郎駐米大使との間で行われたが、条件の鹵軍が合わず頓挫するに至りました。

日米交渉が不調に終わった二か月後の六月二十二日、ヨーロッパ戦線では、突如ドイツ軍がソ連に侵攻したのです。（写真①）

独ソ戦の対応をめぐって、政府・軍部は大騒ぎになります。日本はドイツと三カ国同盟（昭和十五年九月締結）を結ぶ同盟国であり、ソ連とは、一か月前の四月、松岡洋右外相がモスクワで日ソ中立条約を締結し、日、独、伊、ソ連の四か国によって、米・英等の資本主義国に対抗しようと構想していたのです。

しかし、松岡洋右外相が態度を一変し、この際ドイツに呼応し背後からソ連を攻撃しようとする「北進論」を称えたのです。これに伝統的にロシアを主敵とみなしてきた参謀本部の一部が同調し北進論がにわかには高まりました。

一方、陸海軍省は、対抗上、「南進論」を掲げ、北部仏印から南部仏印に南進し、英領マレーやオランダ領東インドが日本の航空機の行動圏内に入るの、東南アジア全体にらみを見ることが出来るという利点を考えました。

〈御前会議で北・南進論を裁可〉

以上の北進論と南進論がせめぎ合うなかで、昭和十六

年七月二日御前会議が開催され、その結果、両論を併記する形の要綱が裁可されたのです。すなわち、「帝国は依然支那事変処理に邁進し、かつ自存自衛の基礎を確立するため南方進出の歩を進め、又情勢の推移に應じ北方問題を解決す」というもの。つまり、従来どおり南進を進め、一方で独ソ戦の展開によってはソ連を撃つ、というものでした。

この方針に従い、七月七日には、関東軍特種演習（閲特演）の名称のもとに七十万人の兵力を満州に集結させ対ソ戦に備え、次いで七月二十八日には、南部仏印への進駐を開始したのです（写真②）。

この御前会議で裁可された要綱（情勢の推移に伴う帝国国策要綱）には、「南部進出の態勢を強化す」の文言に続いて、「帝国は、本号目的達成のため対米英戦を辞せず」との重大な一行が書かれています。これは、北進論を納得させる「作文」でした。

南進派は、南部仏印への進駐は、当時ドイツの傀儡政権下にあったフランス領内への移動であり、アメリカが強い報復措置に出ることはありえない、と考えていたのです。

〈南進に反発し、アメリカが制裁措置を発動〉

ところが、実際は違いました。南部仏印進駐を知ったアメリカは、南進派の思惑とは反対に次々と経済制裁を発動してきたのです。

昭和十六年七月二十五日、在米日本資産の凍結を断行し、同年八月一日には、石油の対日全面禁輸を実行したのです。

これは、日本の想像を超えた強硬措置でした。資産凍結が日本の経済に打撃を与えることは確実でしたし、何よりも、使用量の九割までをアメリカの輸入に頼っていた石油が全面禁輸となつては、戦争継続はおろか、日本の民間産業や国民生活そのものまで、早晚立ち行かなくなるからです。

なぜアメリカがこのような予想外の強硬措置をとったのか。現在の研究から判明しているのは、ソ連を応援するためでした。ドイツとの戦争を始めればかなりのソ連が連合国側から脱落しては、元も子もないのです。連合国の兵器庫と自ら位置づけ

るアメリカでしたが、当時は軍需産業が動き出したばかりで、モノがない。昭和十七年春になれば何とか輸出態勢が整うので、それまではソ連に持ちこたえてもらわなくてはならない。そこで、ソ連が当面の敵ドイツに加えて背後から日本の攻撃を受けることがないように、日本を強く牽制し注意をアメリカにひきつける、つまり、ソ連の背後の脅威を除くために取った措置だったのです。

石油全面禁輸の衝撃は甚大でした。そこから早期開戦論が、軍はもとより国民の間に満ちてきます。戦争に向かう国内の気運は、対日石油禁輸が導いたといえるかもしれません。（本文は加藤陽子著「とめられなかった戦争」文春文庫刊より。写真は、「昭和二十年の全記録」講談社刊より。写真①は、独ソ開戦の様相。写真②は、八月十一日、サイゴンに入港した南派艦隊旗艦・香椎。）

（次回は、アメリカによる石油全面禁輸に対する近衛首相等の対応について記述する予定です。）



（写真①）

